

# ラカンの哲学的思考

宇波 彰

## 主体の消失

ジャック・ラカン（一九〇一―一九八二）は、普通の意味での哲学者ではなく、もちろんいわゆる哲学研究者でもない。しかしラカンは「セミネールX」で、「精神分析の一部は哲学的です」（X:69）と明言している。また実際に、彼の書いたもの、話したことの記録である『エクリ』、『セミネール』などを読むと、その根底に「哲学的思考」と呼ぶべきものがあることがわかる。（ラカンの「セミネール」からの引用は、Seuil社から刊行されたものについては、「X:69」のように、巻数とページ数を示し、またインターネットで公開されている、いわゆる「私家版」については、「XVII-1970.4.25」のように、巻数とセミネールの行われた年月日を示す。『エクリ』については、J.Lacan, Écrits,

Seuil, 1966により、引用に際してはE:745のように示す。）それは伝統的な「哲学」の枠を超えるものであるから、哲学的というよりはむしろ「反哲学的」であるというべきであろう。ラカンは『エクリ』に収められている「フロイトの無意識における主体の転倒と欲望の弁証法」（一九六〇）において、「精神分析は科学の歴史に到来したひとつの新しい地震を示すものである」（E:797）と述べているが、その地震とは、科学のみならず伝統的な哲学の世界にも起きている地震である。ラカンが精神分析というときは、フロイトの思想のことであるから、ラカンはフロイトの思想に潜在している哲学的なものを顕在化したともいえる。それは、まず第一に従来の哲学に対する「反デカルト的」な批判と呼べるものである。

ラカンは一九七五年十一月二十四日にイエール大学で行なっ

た講演で、次のように語った。「われわれが考えていると考えるのは、まったくの幻想なのですが、この幻想がいくつかの哲学体系の源泉にあるのです。」(Schicet 6/7, Seuil, 1976, p.12) 自分が考えていると考えるのは幻想にすぎないというのは、デカルト哲学の根本にある「私は考える したがって私は存在する」というテーゼを正面から否定するものであり、まさに「地震」にはかならない。

このことに関連して想起されるのは、「セミナー XVI」におけるラカンの発言である。そこでラカンは、「私は自分が考えていることを知っている」というのがヘーゲルの哲学の根本であると指摘する (XVI.272)。ラカンはこれがデカルトに関してのヘーゲルの思想であるとする。ラカンはここではヘーゲルの思想を「幻想」だと規定してはいないが、明らかにデカルト、ヘーゲルに対する批判・否定がある。「私は自分が考えていると考える」というのが、伝統的な西欧思想であり、ラカンがそれに対立させるものは、「自らを知らない知、シニフィアンそのものによって支えられる知が存在する」(X.88) という立場である。自分が考えていることを知っているような知は否定され、すでに「私」を離脱した知が現れる。

ラカンは「セミナー XVI」の冒頭で、哲学が「思考の位置を確実にする方法」であることを確認している (XVI.12)。哲学と精神分析とは異なるものであるとラカンは認めてはいるが、それにもかかわらず両者の相互浸透を重視しているのである。

る。またこの「セミナー」ではパスカルについても論じていて、次のように述べた。「ひとつだけ知っておいていただきたいのですが、普通に考えられているのとは反対に、パスカルの賭は未来の生ではなく、私の存在にかかわっているのです。」(XVI.119) ここで重要なのは、「普通に考えられているのとは反対に」というラカンの思考の態度である。それこそがラカンの哲学的思考の根底にあるものである。つねに「普通に考えられていること」を否定する思考、それがラカンの哲学的思考である。

このような思考は、まず第一に「デカルト的主体」といわれている近代哲学の基本概念の根本的な批判・否定となる。ラカンは「同一化」をテーマとする「セミナー IX」(一九六一―一九六二)において次のように述べた。「コギトというデカルト的探求から発展した哲学的系譜においては、唯一の主体でしかなかった。それはこの最後に私が持ち出す〈知を想定された主体〉です。」(IX.1961.115、向井雅明訳による) 近代の哲学的系譜では、コギト(私は考える)というときの主体だけしか認められていなかった。ラカンによる「主体の消滅」という概念は、その主体そのものを否定したのである。

フロイトによる無意識の発見は、主体概念のコペルニクス的転回であるといわれてはいるが、その本当の意味は十分に解明されていない。J・D・ナシオは『ロールの眼』(J・D・Nasio, Les yeux de Laure, Aubier, 1987, 以下 VI と略記)に

において、ハムレットによる父殺しが、彼自身によつては行われず、叔父のクローディアスによつてなされたことに關して、(ハムレットという)「この主体は、ひとりの他者の行動を通して、自分の欲望の対象を受け取る」(YL104)と述べているが、そのときに生じているのが、「断片化した主体」(sujet fragmenté)である。これはすでにデカルト的な統一された主体ではない。このように、ラカンの哲学的思考は、まずデカルト的な主体概念の否定として存在する。

## 反復の破壊作用

ラカンの哲学的思考の第二の論点は「反復」の概念にかかわる。そして、この「反復」は言語の問題と不可分である。ラカンの思考の出発点は分析の経験であり、また「フロイトへの回帰」である。そしてこの二つの原点に共通する中心は、「言語」の機能である。アンドレア・ハーストは『デリダ対ラカン』において次のように述べている。「多くの注釈者たちがいつているように、ラカンのいわゆる〈フロイトへの回帰〉の特徴は、精神分析が根底においては〈話すことによる治療〉(talking cure)だと(う)い(て)ある。」(Andrea Hurst, Derrida vis-à-vis Lacan, Fordham University Press, 2008, p.349) 言語の問題がラカンの思想の中心にあるというのは、いままでもしばしばいわれてきたことであるが、その出発点はフロイトであり、のちに

述べるように、言語はヒステリーの問題に關しても重要な役割を演じている。この「回帰」は反復と密接につながる概念である。反復は、ラカンがフロイトから継承し、展開した重要な概念の一つである。一九四六〜一九六五年の「セミネールXI」は、「精神分析の四基本概念」をテーマにしているが、その四基本概念とは、無意識・反復・転移・欲動である。ラカンの反復の概念の起源はフロイトにある。フロイトは「快樂原則の彼岸」(一九二〇)において、「反復、つまり同一なものの再発見は、それ自体で快樂の源泉を意味しうる」と書いている。(S. Freud, Das Ich und das ES, Fischer Taschenbuch Verlag, 2007, S.220-221) 過去の経験、できごとの想起が反復として理解されている。ラカンは「セミネールXVI」において、「享樂は再発見の努力にはかならないのです」(XVI.121)と述べているが、この「再発見」はフロイトのことばの反復であるかもしれない。想起は「同一なものの再発見」であるが、この再発見とかたちの反復には言語の働きが介入する。つまり、「再発見」とは、言語によつてオリジナルなものを反復することである。夢についてのラカンの考察には、反復の問題について示唆を与えるものがあるだけでなく、「夢は解釈の対象である」という通常の理解を超えたものがある。もちろんラカンは夢の解釈そのものを否定するのではない。しかし、「夢は野生的 (sauvage) な解釈ではありませんが、すでにひとつの解釈です」(XVII.197) というラカンの考えは、通常の夢についての考え方を超えるも

のである。「夢は像になった翻訳であり、シニフィアンとして分節可能なものとして存在しています」(XVI.197)というラカンの考えは、明らかにフロイトを超えている。夢は何かあるものを、まず像として反復する。そのとき、夢は何を「翻訳」という反復の対象としているのかという問題があり、もちろんそれは「無意識」であるが、それではその無意識とは何かという問題が浮上してくる。とにかくこの「セミネール」では、「イメージ化された(像として示された)事後効果」(XVI.260)という注目すべき概念が提示されている。この「事後的に、像として示された」野生的な解釈を、さらに夢を見た人が言語によって「合理的な解釈」を行うというのが、ラカンによる夢の解釈のプロセスである。「この合理的な解釈において重要なのは、再構成されたフレーズです」(XVI.197)とラカンは述べているが、「再構成されたフレーズ」とは、言語化された夢のことである。

ラカンは、一九七五年十一月二十四日にイエール大学で行なった講演のなかで、フロイトによる夢の解釈が、夢の「物語」(récit)に限定されていることを指摘した。フロイトが考察した夢は、像としての夢ではなく、言語化された夢である。フロイトは夢の「言語的材料」(le matériel linguistique)だけを扱っているという指摘である (Schiffert, 67, p.13)。とにかく言語化されたオリジナルなものを最終的にはふたたび言語によって「反復」することが、解釈であるということになる。ラカン

はすでに一九五四年一月十三日の「セミネール」において、「夢とは想起である」(Träume sind auch erinnern)というフロイトのことは引用している (I.20)。想起とは言語化のことである。このときの「セミネール」では、「歴史は現在において歴史化される限りでの過去です」(I.19)とも述べているが、「歴史化」とは、あとから、事後的になされた「言語化」のことである。

このばあい、「オリジナルなもの」は、第一次的には個人の経験、もしくは何かのできごとである。ばあいによって、それは現実には存在しない単なる幻想である。それを「あとから」言語で解釈するのであるから、そこには必ず「合理化」がある。言語化という合理化によって語られたこと、書かれたことは、あとから、事後的に行われた結果であるから、そこに生産されたものは、ラカンの表現を借りれば、「美しう嘘」(mensonge beau, VIII.38)「真正性の錯覚」(illusion d'authenticité, VIII.55)である。「真正性の錯覚」は次のような文脈で語られている。「この対話篇(饗宴)は、ほかの対話篇と同じではありえませんが、それにもかかわらず、そこには私が(真正性の錯覚)と呼んだものを作り出す状況があるのです」(VIII.55)その状況とは、『饗宴』のテキストが反復を重ねて作られたものであることを指す。反復は、オリジナルなものを歪め、否定し、破壊する力を持っている。

ラカンは、プラトンのこの対話篇を対象とした「セミネー

ルVIII」を行なっているが、そこで論じられている「饗宴」そのものが反復の所産である。「饗宴」は「誰かが聞いてきたソクラテスのことばを、その誰かから聞いた別のひとが語る」(VIII:55)とどう反復によって成立する。ラカンは次のように具体的に述べている。(「饗宴」では)「ずっと語っているのはアポロドーロスで、彼はアリストテモスから聞いたことを反復 (repetit) しているのです。」ここでラカンは「反復する」(repeten) という動詞を使っていることが重要である。ソクラテスの語ったオリジナルなものは、このように反復を繰り返して言説化されていく。

森進一はプラトンのこのテクストの解説において、『饗宴』が『パイドーン』や『テアイテトース』と同じように、「報告者が、自分の見聞したことを報告するという形式」で書かれているとする。そして『饗宴』では、「報告という間接性」が非常に複雑になっているとして、次のように説明する。「直接饗宴に参加したアリストテモスの報告が、つきつき誤って伝えられているのをアポロドーロスが訂正するというかたちになっている。」(森進一訳『饗宴』新潮文庫、2006、p.191)このプロセスのなかで、オリジナルなものが歪められ、間違つて伝えられることがあるのは当然である。ばあいによっては、オリジナルなもの否定されるであろう。これが「真正性の錯覚」にほかならない。これは、世界が言語化によって存在するという考えである。しかし、それは同時に反復に含まれる破壊作用の

確認である。

### 心身問題と言語

このようにラカンの思考には、言語の力を重視するものがあるが、それは第三の論点として、いわゆる心身問題とかかわる精神と身体、もしくは精神と物体との関係の問題は、ながいあいだにわたって哲学が考察してきた対象であった。ラカンの思考は、ここでも注目に値する。今回のコロックで、向井雅明氏は、自閉症の患者においては、感覚と知覚が分離されていて、たとえば「熱い」という知覚がないばあいは、やけどにならないという例を挙げて論じた。これを換言解釈すると、その患者はリマジネールの領域にとどまっただけで、ル・サンボリックの領域が存在しないということになる。「感覚」はリマジネールの領域にあり、「知覚」はル・サンボリックの領域にあると見ることができると。つまり、かたち・身体・像の領域と、言語・記号の領域とが分断されるばあいがあるということである。この二つの領域の関係について示唆を与えるのが、フロイトのヒステリー論である。フロイトは『ヒステリー研究』のなかで次のように書いている。「誘因となる出来事に関する思い出を完全に明晰なかたちで喚び覚まし、その思い出に随伴する情動をも目覚めさせ、さらには患者が可能な限り詳細にその出来事について物語り、その情動に言葉を与えたとき、個々のヒステリー症

状はただちに消失し、二度と回帰することはなかった。」(フロイト、プロイアー、金関猛訳『ヒステリー研究上』ちくま学芸文庫、二〇〇四年、十六頁、同書下巻二二二頁にも再録)ここでフロイトが論じていることを、ラカンの概念を使って換言解釈すれば、ヒステリー患者がリマジネールの領域にとどまっているときには症状が現れるが、ル・サンボリックの領域に立ち入るとき、その症状は消えるということになる。

言語は心的なものの表象として考えられているが、ナシオはフロイトが考察したドストエフスキーのばあいも視野に入れる。ドストエフスキーがてんかんの発作に襲われていたことはよく知られているが、ナシオはその発作をドストエフスキーの父殺しへの欲望と関連させて考えている。つまり、ドストエフスキーの父を殺したいという欲望が、てんかんの発作という危機の出現によって「部分的」にせよ満たされたと解釈する(YL101)。ドストエフスキーのてんかんの発作は、フロイトによればヒステリーにほかならない。(てんかんの発作によって)「気を失なったドストエフスキーは、死んだ父であり、同時にこの主体は、殺害という行為そのものであるシニフィアンと同一である。」(YL101)

これもまた、ナシオのいう「言語への身体の従属」にほかならぬ。(J-D. Nasio, *Cinq leçons sur la théorie de Lacan*, Payot et Rivage, 1994, p.52) 身体の運動は言語によって支配されるということである。それはフロイトのヒステリー論を根

拠にする考えである。ナシオは『ヒステリー 精神分析の申し子』(姉齒一彦訳、青土社、一九九八年)においても、ヒステリーをテーマにして、精神と身体の関係の問題について考察する。ナシオは、フランスの精神医学の系譜においては、ヒステリーは「強い情動負荷を受けた観念や精神的表象の抉るような活動から生じた病気」(一五九頁)として規定されてきたとする。そして「表象が強ければ、つまり、表象が強く過剰な感覚を表象するものであれば、この表象は、突然身体の現実に転置して、身体症状の形で現れる」(一五九頁)ことになる。この身体症状がヒステリーである。ことを換えていうと、観念が身体を場にして現実化するのであり、たとえば「私は歩けない」と考

えるとき、私の足は動かなくなる。この考えは、『ロールの眼』においても展開されている。自我にとつての「耐えがたい表象」に対して、自我は防衛するのであるが、そのひとつの現れがヒステリーである。精神の運動が身体の運動へと変換される。ナシオは、ヒステリーにおいては、耐えがたい表象が、「身体のある一定の部分に局在化する」(YL109)のだと説明する。問題は、その「局在化」がどのようにして実現されるのかということであるが、それはまだ解明されていないというべきであろう。おそらくそのときに機能するのが、言語の力である。「ヒステリーの身体苦痛は一つの観念を造形した体現の結果」(一六〇頁)であるが、それをナシオは「文法的言語の身体の言語への翻訳」(一六〇頁)であると規定する。これはナシオが『五つのレッ

ス』で述べた「言語への身体の従属」である。

それは言語が身体に命令することであり、そこには言語の「行為遂行的」(performative)な機能がある。ここまではラカンの哲学的思考のいくつかの論点について述べてきたが、そこにはラカンによる次のようなフロイトの考えの評価がある。「フロイトは自分にとって異質な(étrange)次元を導入することによって、心理学的考察の基盤そのものを変えてしまったのです。」(IV412)ラカンもまた、受け継がれてきた思考とはまっ

たく異質なものを導入するという思考の方法によって、哲学の領域に地震をもたらしたといえよう。

(付記。本稿は二〇〇九年十一月十四日に明治学院大学言語文化研究所主催のコロック「ジャック・ラカンを考える」において行なった報告の草稿に、全面的に加筆・修正を施したものである。)